

看護学生が持つ看護職イメージ

—性役割の視点からの臨床看護婦との比較—

内海知子*

香川県立医療短期大学看護学科

A Study on Image of Nurses in Nursing Students

—Compare with Nursing Staffs from the View-point of the Gender Role—

Tomoko Utsumi

Department of Nursing, Kagawa Prefectural college of Health Sciences

Abstract

Image of nurse was investigated with BSRI questionnaire, which were defined the nurse into types of Androgyny, Masculinity, Femininity and Undifferentiated. Questionnaire was delivered to 88 persons of nursing student and 89 of nursing staff. The most of answers showed "Androgyny" in both groups of nursing student and staff. However, nursing staffs had higher image of "Femininity". It was also suggested in both groups that job of nursing had a more intensive nature of female character and so fewer male nurses.

Majority of nursing staffs were thinking that it should be required to raise up the social status of nursing job in order to have more number of male nurses. The nurses are working as a mother role under paternalism of medical doctor traditionally. This investigation revealed that it may be the cause of less members of male nurses as well. Image of nurse should also be changed into free from gender in our social environments.

Key Words : 看護職イメージ (image of nurse), 看護学生 (nursing student),
ベム性役割調査 (BSRI), 性役割 (gender role)

*連絡先 : 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護科

*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0123, Japan

はじめに

看護職は、あらゆる職業の中で男性の割合が極めて低い職種のひとつである。このことは、看護が歴史的に家庭における母親役割が職業化してきたという側面を持つことが関係している。つまり女性的な職業とは、世話や家事といった女らしい役割の自然な発展形態だと考えられてきた。そして男性中心の社会で育てられ看護職についた女性たちは、通常、伝統的な価値観と態度を身につけている¹⁾。

Janet Muff²⁾は、女性的あるいは男性的な性格は、ほとんどの場合生得的な性格ではなく後天的に学習された性格であるという諸研究があるにもかかわらず、養育的で家事を好むことは、伝統的な女性性が意味するところだと信じているために、女性は伝統的な役割を縮小ないし放棄して、非伝統的な役割を取得することに対して葛藤や罪悪感を抱くと述べている。そして看護職者は、今でも職業差別と性差別との結合により低い地位におとしめられている³⁾。つまり看護職はそのほとんどが女性であることで、女性の職業であることと女性であることの2点において、問題を抱えることになるのである。

筆者が昨年実施した、看護職者が持つ看護職イメージの調査⁴⁾では、看護職者は看護職イメージを「女性性」では捉えていなかったが、看護職に男性割合が低いことについては女性のイメージが強いので仕方がないと考えていた。今回、看護短期大学生にも同様の調査を行ない、看護短期大学生が持つ看護職イメージを明らかにし、臨床看護婦のもつ看護職イメージと比較するとともに性役割の視点から検討した。

看護短期大学生が持つ看護職イメージを明らかにすることは、看護が女性イメージで捉えられるだけの職業から脱却する必要があることを、学生とともに考える資料となるだろう。

用語の定義

性役割：男女それぞれにふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的・文化的期待、規範およびそれに基づく行動をさす。

対象および方法

1. 対象

対象は、K 県立医療短期大学の看護学生93人(1

年生47人、2年生46人)、K 県内の病院に勤務する臨床看護婦98人である。

2. 調査期間と方法

看護学生は、2000年10月に本研究の趣旨を説明し、研究に同意の得られたものに質問紙を配布、記入後回収した。回収は92人(98.9%)で、男子学生1人の回答も除外した有効回答は88人(95.7%)であった。

臨床看護婦は、1999年10月に施設の責任者に調査依頼し、留め置き法で実施した。アンケート前文に、本研究の趣旨を記載し研究に同意の得られた人のみ回答を依頼した。アンケート配布後1週間で郵送にて回収した。回収は93人(94.9%)、有効回答は89人(95.7%)であった。

3. 調査の内容

看護学生と臨床看護婦が看護職にどのようなイメージをもつか(以下、看護職イメージ)は、日本語版 BSRI (ベム性役割調査目録)⁵⁾を用いて測定した。BSRI は、ベムが1974年に作成した質問紙であり、多数の男女から男女の性役割のステレオタイプを収集することによって項目の選定を行ったもので、採点化段階で、M (男らしさ) と F (女らしさ) が別々に得点化できる。男性性・女性性・中性性の各20項目について、〔1：非常にあてはまらない〕から〔7：非常にあてはまる〕までの7段階で答えるものである。また、男性性・女性性・中性性項目別に合計し、それぞれの中央値を算出、この中央値を基準に心理的性度を下記の4群に分類する。

I 群 両性具有型 (男性性高・女性性高群)

II 群 男性型 (男性性高・女性性低群)

III 群 女性型 (男性性低・女性性高群)

IV 群 未分化型 (男性性低・女性性低群)

このほか、看護職をめざした動機、看護職における男性割合が低いことについての考え、今後男性看護職が増えるための条件について調査した。臨床看護婦には、男性看護職と同一部署で働いた経験の有無と、男性看護職に対してどう思うかを BSRI の男性性20項目から選んでもらった。

4. 分析方法

看護職イメージについて測定した BSRI 得点は、看護学生と臨床看護婦との比較に Mann-Whitney の U 検定を用いた。心理的性度と、属性および看護学生と臨床看護婦との比較には、 χ^2 検定およびフィッシャーの直接確率法を用いた。統計ソフトは、SPSS 10.0J for Windows

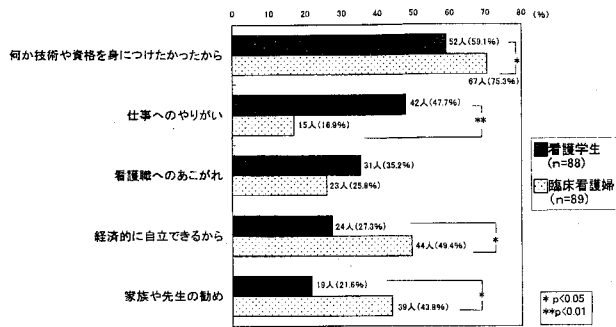


図1 看護職をめざした動機

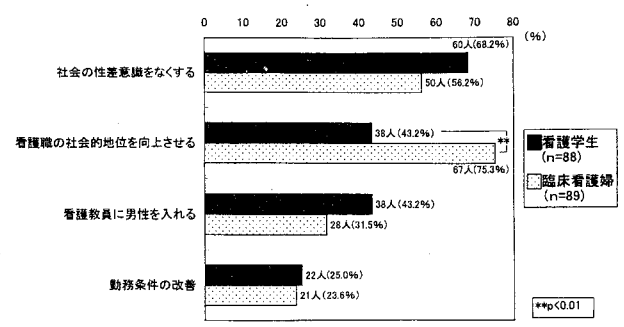


図3 看護職に男性が増えるためには

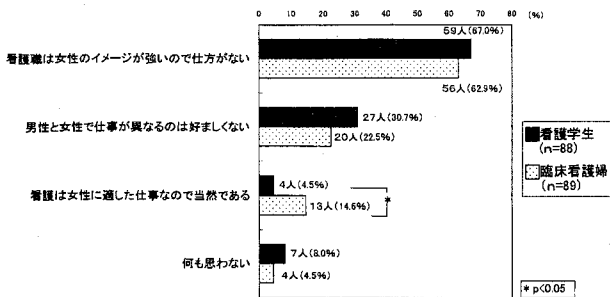


図2 看護職における男性割合が低いことについてどう思うか

を使用した。

結 果

看護学生の平均年齢は、19.06歳 (SD; ± 0.74) であった。入院経験のあるものが35人 (39.8%)、同居しているまたは入学まで同居していた家族に入院経験があるものが69人 (78.4%)、身近な人に医療従事者がいるものは34人 (38.6%)、看護体験への参加のあるものが40人 (45.5%) であった。看護職を目指した動機について、最も多かったのが「何か技術や資格を身につけたかったから」52人 (59.1%)、ついで「仕事へのやりがい」42人 (47.7%)、「看護職へのあこがれ」31人 (35.2%)、「経済的に自立できるから」24人 (27.3%) であった (図1)。看護職における男性の割合が低いことについては、「看護職は女性のイメージが強いので仕方がない」59人 (67.0%)、「男性と女性で仕事が変わるのは好ましくない」27人 (30.7%) であり、「看護職は女性に適した仕事なので当然である」と考えていたものは4人 (4.5%) であった (図2)。男性の看護職が増える条件としては、「社会の性差意識をなくする」60人 (68.2%)、「看護職の社会的地位を向上させる」・「看護教員に男性を入れる」

38人 (43.2%) であった (図3)。

臨床看護婦は、40歳代が最も多く41人 (46.1%)、次いで30歳代21人 (23.6%) であり、臨床経験の平均年数は、17.5年 (SD; ± 8.9) であった。看護職を目指した動機は、最も多かったのが「何か資格を身につけたかったから」67人 (75.3%)、「経済的に自立できるから」44人 (49.4%)、「家族や先生の勧め」39人 (43.8%) であった (図1)。看護職における男性の割合が低いことについては、「看護職は女性のイメージが強いので仕方がない」56人 (62.9%)、「男性と女性で仕事が変わるのは好ましくない」20人 (22.5%) であり、「看護は女性に適した仕事なので当然である」13人 (14.6%) であった (図2)。男性の看護職が増える条件としては、「看護職の社会的地位を向上させる」67人 (75.3%)、「社会の性差意識をなくする」50人 (56.2%)、「看護教員に男性を入れる」28人 (31.5%) であった (図3)。臨床看護婦で、男性看護職者と実際に同一部署で勤務した経験を持つ人が、81人 (91.0%) で、男性看護職者に対して、「負けず嫌い」52人 (58.4%)、「個人主義的」46人 (51.7%)、「自分の意志を押し通す力がある」45人 (50.6%) と感じていた。

BSRIで測定した看護職イメージの中央値は、看護学生では男性性得点103.0点、女性性得点98.0点であり、学年間や他の属性との比較において差は見られなかった。臨床看護婦では、男性性得点107.0点、女性性得点103.0点であった。得点を看護学生と臨床看護婦で比較すると、女性性得点について臨床看護婦が有意に高かった ($p<0.05$)。

看護職イメージを心理的性度で分類すると、看護学生はI群両性具有型31人 (35.2%)、II群男性型14人 (15.9%)、III群女性型13人 (14.8%)、IV群未分化型30人 (34.1%) であり、学年間や他の属性との比較において有意な差は見られなかった。臨床看護婦では、I群両性具有型24人 (27.0%)、II群男性型19

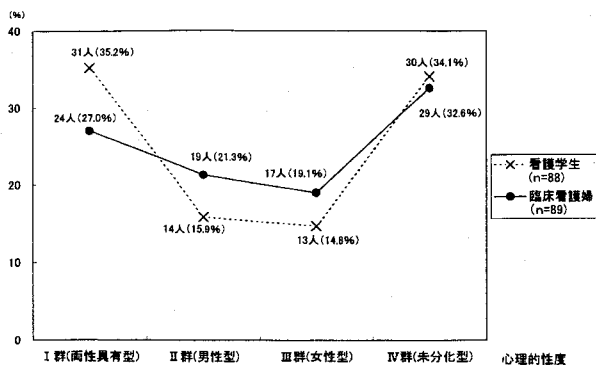


図4 看護職イメージ (心理的性度で分類)

人 (21.3%), III 群女性型 17 人 (19.1%), IV 群未分化型 29 人 (32.6%) であった (図 4). 心理的性度の人数を, 看護学生と臨床看護婦で比較すると, 有意な差はみられなかった。

考 察

看護職を目指した動機について, 看護学生, 臨床看護婦ともに資格取得が最も多かったのは, いままでと同じ傾向である。しかし, この資格取得と経済的自立, 他者の勤めによる看護職選択の動機は, 看護学生が臨床看護婦より有意に少なく, 仕事へのやりがいと動機とした人が多かった。このことは, 看護学生はより主体的に看護職という職業を選択していると考えられる。バブル崩壊後, 大学生をはじめとする就職率が低迷している。青島⁶⁾は, 好況時には給与条件の良い一般事務職などに向かった女性求職者の流れが, 就職や転職が厳しさを増してきたここ数年は, 確実に職を得やすい女性向きの職業に逆戻りしている現象が見られ, この動きは女子高校生の進路選択にも影響を与え始めた, と述べている。また高齢化社会の到来で, 医療・福祉分野でのマンパワー確保がクローズアップされているという社会背景の中で, 看護学生は主体的に職業として看護職を選択したのではないだろうか。

次に看護職における男性割合が少ないことについては, 看護学生, 臨床看護婦ともに 6 割以上の人が, 看護職は女性のイメージが強いので仕方がないと考えていた。このことは, 看護職が家庭における母親役割が職業化した側面を持ち, 早くから女性職として位置づけられており, イメージが固定化されているためだと考える。匠⁷⁾は, このような職業における男性職・女性職の存在は, その社会のもつ男らしさ・女らしさのイメージと結びついており, 性別役

割の固定化が要因になり, 結果的にその意識を助長継続することになると述べている。

看護職イメージ得点では, 看護学生, 臨床看護婦ともに男性性得点よりも女性性得点が低く, 「看護職=女性」とは捉えてはいないという結果だと考えられる。しかし女性性得点については, 看護学生より臨床看護婦の得点有意に高かった。女性性得点は男性性得点より低い, 臨床の場に入ることによって女性性得点有意に高くなること, また少数ではあるが看護は女性に適した仕事なので当然であると考えている人が臨床看護婦のほうに有意に多かったこと, 看護職に男性が増えるためには, 看護職の社会的地位を向上させると考えている人が臨床看護婦のほうに有意に多かったことを考え合わせると, 現実の看護職者が働く臨床の場では, 女性性得点を高くする要因が存在するということが考えられる。

この要因のうち最大のものは, 医師を中心としたパターンリズムではないだろうか。勝又³⁾が述べているように, 医療におけるパターンリズムは, 医師が患者を子供扱いし, 患者の自律的判断や決定権をないがしろにするのを正当なものとし, それによって医師の患者支配を正当化する考えでもある。そして, 天職としての看護, 看護における母性意識の強調の存在は, 医師の命令に従順なるべしというイデオロギーとなる危険をはらんでいる。さらに勝又は, このことにより看護も一個の労働であるという認識を妨げることになるとしている。看護学生は, 仕事へのやりがいと動機として看護を選んだものが多かったが, 看護婦—医師関係に残るこのような流れは, 看護学生が臨床現場に入った時影響を及ぼす可能性を残すと考えられる。看護職イメージは, すなわち自分が看護婦として働いている時の自分自身であるとも考えられるからである。

また, 看護職イメージを心理的性度分類で見ると, 看護学生, 臨床看護婦ともに両性具有型で看護職イメージを捉えているものが多かった。ベムは, 両性具有的人物とは, 男女いずれかの性の型づけを受けてこなかったもの, 男性役割と女性役割のいずれをも状況に応じて自由に選べるものを意味しており⁸⁾, 適応力が最もあるとしている。つまり, 看護職を性役割の延長としては考えておらず, 状況に応じて両方の役割が必要な職業, また両方の役割を備えていなければならない職業と考えているといえるのではないだろうか。一方, 未分化型で, 看護職イメージを捉えているものも多かった。ベムは, 未分化型は最も適応しないとしている。看護学生につい

ては、この点は今後の臨地実習における留意点とする必要があると考えられる。

小島⁹⁾らの調査では、一般の人達が抱いている看護または看護婦に対するイメージは、女性性と関連する内容のもの、従前からの看護に対する抽象的なもの、現実の看護の実態からのものが多いことが確認されている。Anne Hudson Jones¹⁰⁾は、一般の人が持つ看護職に対するイメージは、いまなお大半がジェンダー特定の女性的な役割と結びついた否定的イメージであり、それは女性およびすべての種類の女性労働者の地位向上によってのみ可能となるだろうと述べている。そして、その問題の焦点はケアの社会的価値であり、社会がこうしたすべてのケアの価値を正当に認めるまでは、看護の価値も認められないとしているが、保健・医療・福祉分野において政策や価値観が激しく変化している現在は、看護職にとってチャンスであると考ええる。看護職が、健康問題に真剣に取り組むことで看護の信頼は獲得することになるであろうし、取り組まなければ看護の信頼は失われ、費用対効果の視点から看護職の雇用が減少するなど厳しい状況に陥ることになるだろう¹¹⁾。あきらめずに、専門職としての看護職イメージに変えていかなければならない。

今回の調査で使用したBSRIに代表される性役割スケールは、いくつかの限界が指摘され、新しいスケールが研究されている。その限界とは、同じ女性の中でも伝統的な役割意識を持った人と、フェミニズムの立場の人では自分の持つ性役割規範や価値観が違うため、同じ性役割スケールを用いても評価の枠組みが異なり、結果的には測定値が違ってくるなどである。

昨年の調査で看護職のもつ看護職イメージを、今回の調査で看護学生のもつ看護職イメージを調査した。それにより看護職者自身、また看護職を目指す女子学生は看護職イメージを女性性では捉えていないことがわかった。しかし、看護職が男性にも女性にも等しく選択され得る職業となるためには、看護職者自身が意識してその職業の持つイメージを変えていかなければならない。そしてそれとともに、男性が看護職を目指したときに、受け入れる学校の体制も整備していく必要があると考える。今後は、看護を選択した男子学生や、男子高校生が進路を選択するときに看護職をどう捉えているか、また一般学生は看護職にどのようなイメージを持っているかなどを調査し、看護職者や女子看護学生との相異を検討したい。

結 論

看護学生88人、臨床看護婦89人を対象に、それぞれが持つ看護職のイメージを、BSRIを用いて調査した。その結果、以下の結論を得た。

- (1) 看護学生、臨床看護婦ともに、看護職イメージを両性具有型で捉えていた。
- (2) 臨床看護婦は看護学生に比べ、看護職イメージをより女性性で捉えていた。
- (3) 看護学生は臨床看護婦に比べ、看護職を選んだ動機として仕事へのやりがいをあげたものが多く、看護職という職業をより主体的に選択していた。
- (4) 看護学生、臨床看護婦ともに6割以上が、看護職に男性が少ないことを看護職は女性のイメージが強いのでは仕方ないと考えていた。
- (5) 臨床看護婦は看護学生に比べ、看護職に男性が増えるためには看護職の社会的地位を向上させることが必要と考えている人が多かった。

文 献

- 1) Janet Muff (1988) "Images of Nurses" (Anne Hudson Jones), 1st ed. University of Pennsylvania Press, Pennsylvania. [中島憲子監訳 (1997) "看護婦はどう見られてきたか", 時空出版, 東京, p.232]
- 2) Janet Muff 1) p.246.
- 3) 勝又正直 (1994) 看護のマターナリズム (母性主義) と天職意識. 名古屋市立大学看護短期大学部紀要, 6: 97-101.
- 4) 内海知子 (1999) 看護職者がもつ看護職イメージ-性役割の視点から-. 香川県立医療短期大学紀要, 1: 45-50.
- 5) 安達圭一郎, 上地安昭, 浅川潔司 (1985) 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究 (I) - 日本語板作成の試み. 日本教育心理学会第27回総会, p484-485.
- 6) 青島祐子 (1997) "ジェンダーバランスへの挑戦", 学文社, 東京, p138-141.
- 7) 匠雅音 (1992) "性差を超えて", 新泉社, 東京, p16-20.
- 8) 平野貴子, 神野道子, 小林幸一郎, Joanna Liddle (1995) 女性の職業生活と性役割, "日本のフェミニズム3" (井上輝子, 上野千鶴子, 江原由美子編) 岩波書店, 東京, p179-199.
- 9) 小島照子, 池田浩子, 桜井しのぶ (2000) Gender 的視

点で考える看護 第3報－看護と女性性－. 日本看護
研究学会雑誌, 23 (3) : 189

- 10) Anne Hudson Jones 2), p 4 -5.
- 11) 鶴田恵子, 田中由紀子 (2000) 変革における看護実践
のシステム化－急性期看護から訪問看護まで－. 日本
看護科学学会学術集会講演集, 12.

受付日 2001年1月5日